３．新町川水際ゾーン（藍場浜～新町橋～両国橋～富田橋）

（１）過去から現在に至るまで

○藍場浜は、江戸時代から水運の発着場として発展。
→現在は、阿波おどり（藍場浜演舞場として利用）を筆頭に阿波の狸まつり、はなはるフェスタ、マチ★アソビなど多くのイベントが開催される重要スポット。

○新町川から両国橋にかけては、新町川･阿波製紙水際公園（1989 年完成）やしんまちボードウォーク（1996 年完成）が整備されており、徳島市中心のシンボル的な憩いの場として、またとくしまマルシェ、マチ★アソビなどのイベントでも利用。

○両国橋から富田橋にかけては、徳島こども交通公園があり、阿波おどりの南内町演舞場として利用。

（２）現状

①統計

本ゾーンは、東新町･両国本町をはじめとする商店街が集積する一方で、藍場浜公園や新町川水際公園、しんまちボードウォークといった水辺空間を活用した各種イベントの開催地として、にぎわい創出の舞台となってきた。本節では、商店街などの商業統計データおよび主要イベント等の状況に基づき、本ゾーンの現状を分析する。

ａ．商店街および主要産業の動向

本ゾーン内に位置する主要商店街の動向を把握するにあたっては、2004 年･2014 年（商業統計調査）から 2021 年（経済センサス・活動調査）への調査体系の変更や対象産業の拡大により、単純な数値の時系列比較には留意を要する。その上で、連続してデータを追うことが可能な小売業の事業所数推移をみると、2004 年から 2021 年にかけた 17 年間で、小売業者数は東新町・籠屋町地区で 105 事業所から 37 事業所へ（▲ 64.8％）、両国地区 2 商店街（両国本町・両国橋南）で 55 事業所から 25 事業所へ（▲ 54.5％）と、いずれの地区でも半数未満に落ち込んでいる。

この事業所数の減少幅は、単なる調査手法の差にとどまらず、全国的な商店街の構造変化および徳島県内における購買行動の変化を反映したものと考えられる。全国的な傾向として、人口減少や EC の普及に加え、郊外大型店の進出に伴う集客力の低下、店主の高齢化や後継者不足が深刻化している。中小企業庁「令和 3 年度 商店街実態調査」では、商店街の景況感について「衰退している」または「衰退の恐れがある」と回答した割合が 67.2％に達し、来街者数が「減った」とする商店街も 68.8％に上る。

徳島県内においても、2000 年代以降「フジグラン北島（2001 年）」「フジグラン石井（2006 年）」「ゆめタウン徳島（2011 年）」「イオンモール徳島（2017 年）」といった大規模商業施設が、徳島駅の 10km 圏内の郊外に相次いで進出し、購買力の流出が進行した。これに伴い、本ゾーン内の商店街においても空き店舗の発生が常態化しており（『徳島市中心市街地活性化基本計画』に示された令和 3 年度調査では、東新町 1 丁目 29％、籠屋町 33％、両国橋南 24％など）、機能の低下が続いている。

このように物販店が減る一方で、現在の商店街にどのような店舗が集まっているのか、2021 年の経済センサスデータから業種構成を確認する。

両国地区の 2 つの商店街では、全 89 事業所のうち飲食サービス業が 51 事業所（57.3％）と過半

数を占めている。統計上の制約はあるものの、現在の店舗構成からは、商店街の主な機能が飲食中心へと変化している様子がうかがえる（図表 3-21）。

これに対し、東新町・籠屋町地区では飲食サービス業も 39.4%（28 事業所）を占めるものの、依然として小売業が 52.1%（37 事業所）と過半数を占める構成となっている（図表 3-22）。なお各調査を通して物品販売と飲食・サービス等を兼業する事業所においては、売上高や従業者数等のうち最も割合が大きい「主業」で分類されるため、実態として複数の機能を備えていても主業側にのみ計上される点にも留意が必要である。

図表 3-21　両国地区 2 商店街（両国本町・両国橋南）における事業所数の推移と業種構成

産業中分類	2004 年	2014 年	2021 年
小売業	55	28	25
飲食サービス業	集計対象外	集計対象外	51
生活関連サービス業	集計対象外	集計対象外	13
合計	55	28	89

注 1：2004 年・2014 年は「商業統計調査」に基づき「小売業」のみが調査対象のため、飲食店や生活関連サービス業等は集計対象外であり、単純な時系列比較には留意を要する。
注 2：各調査年で調査体系、商業集積地区（エリア）の定義および集計手法が異なるため、区域や集計基準が完全に同一であることを示すものではない。
注 3：平成 16 年（2004 年）の「両国本通商店街」および「両国橋通商店街」は、平成 26 年（2014 年）・令和 3 年（2021 年）の「両国本町商店街」および「両国橋南商店街」とそれぞれ商店街コードが一致することから、同一の商業集積地区に関する名称の表記違いまたは名称変更の可能性がある。本稿では便宜上、それぞれ同一系列として推移を整理している。
出所：2004 年・2014 年は経済産業省「商業統計調査」、2021 年は総務省・経済産業省「経済センサス - 活動調査」（両国本町商店街および両国橋南商店街の合算値）。

図表 3-22　東新町・籠屋町地区商店街（東新町 1 丁目・2 丁目、籠屋町）における事業所数の推移と業種構成

産業中分類	2004 年	2014 年	2021 年
小売業	105	30	37
飲食サービス業	集計対象外	集計対象外	28
生活関連サービス業	集計対象外	集計対象外	6
合計	105	30	71

注 1：2004 年・2014 年は「商業統計調査」に基づき「小売業」のみが調査対象のため、飲食店や生活関連サービス業等は集計対象外であり、単純な時系列比較には留意を要する。
注 2：各調査年で調査体系、商業集積地区（エリア）の定義および集計手法が異なるため、区域や集計基準が完全に同一であることを示すものではない。
注 3：平成 16 年（2004 年）の「かごや町商店街」は、平成 26 年（2014 年）・令和 3 年（2021 年）の「籠屋町商店街」と商店街コードが一致することから、同一の商業集積地区に関する名称の表記違いまたは名称変更の可能性がある。本稿では便宜上、それぞれ同一系列として推移を整理している。
出所：2004 年・2014 年は経済産業省「商業統計調査」、2021 年は総務省・経済産業省「経済センサス - 活動調査」より作成（東新町 1 丁目商店街、東新町 2 丁目商店街および籠屋町商店街の合算値）。

また本ゾーン全体における直近 5 年間（2016 年から 2021 年）の主要産業の動向をみても、「卸売業、小売業」が 67 事業所から 56 事業所へ 11 事業所減少（▲ 16.4%）、「宿泊業、飲食サービス業」が 50 事業所から 48 事業所へ 2 事業所減少（▲ 4.0%）している（図表 3-23）。2021 年調査はコロナ禍の最中であり、一時的な落ち込みなどが考慮されるものの、エリア全体として店舗数の減少・停滞傾向がみられる。

図表 3-23　新町川水際ゾーン（藍場町、東新町、南内町、両国橋）の事業所数推移

産業中分類	2016 年	2021 年	増減数	増減率
卸売業，小売業	67	56	-11	-16.4%
宿泊業，飲食サービス業	50	48	-2	-4.0%
生活関連サービス業，娯楽業	23	22	-1	-4.3%

出所：総務省・経済産業省「経済センサス - 活動調査」

b．水際空間などにおけるイベント集客の状況

日常的な買い物機能や店舗数が減少する一方で、水辺空間などを活用したイベント・集客事業は、本ゾーンにおける人出の維持・にぎわい創出に寄与している。

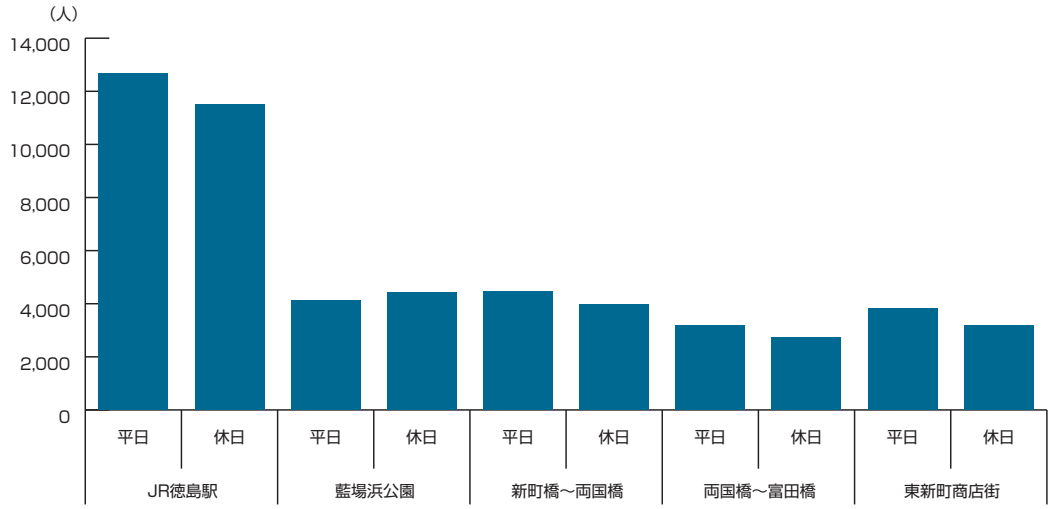
阿波おどり期間における藍場浜・南内町などの各演舞場への集客をはじめ、「マチ★アソビ」、「はな・はる・フェスタ」、「阿波の狸まつり」、毎月開催される「とくしまマルシェ」など、年間を通じて多様なイベントが集客を生み出し、定期的なにぎわいの創出に寄与している。

②人流データ

新町川一帯（藍場浜公園、新町橋～両国橋、両国橋～富田橋）および東新町商店街の滞在人口（1日平均）について、JR 徳島駅と比較し分析を行った（図表 3-24）。

図表 3-24　JR 徳島駅と、新町橋一帯および東新町商店街の滞在人口（1 日平均）の比較

《条件》
集計方法：全人口推計値
データ期間：［平常時　平日］2026 年 5 月 11 日（月）～ 15 日（金）
　　［平常時　休日］2026 年 5 月 9 日（土）～ 10 日（日）



データ提供：KDDI・技研商事インターナショナル「KDDI Location Analyzer」
調査に用いたデータは au（KDDI）スマートフォンの位置情報ビッグデータ。（au スマートフォンユーザーからの同意に基づき取得し、個人が特定できない形式に加工した位置情報および属性（性別・年齢層）情報データ）
・データには 20 歳未満、およびインバウンド観光利用者のデータは含まれません。
・分析結果の数値は全人口推計値（サンプルを、国勢調査の市区町村別・性年代別人口に基づいて拡大した値）となります。

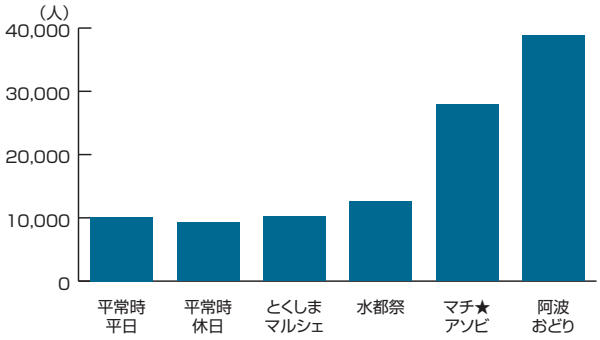
その結果、JR 徳島駅は、平日が約 13,000 人、休日が約 11,000 人であるのに対し、新町川一帯および東新町商店街はいずれも平日、休日とも 3,000 人～ 4,000 人規模にとどまっており、現状において十分な滞留エリアとして機能していない実態が確認できる。

また、平日と休日の数値を比較すると、藍場浜公園を除く各エリアで平日の滞在人口が休日を上回る結果となった。この動態は、特に休日において、当エリアが「目的を持って時間を過ごす場」として選ばれにくい現状を示唆している。

続いて、新町橋一帯および東新町商店街における平常時とイベント開催時の滞在人口（1日平均）を比較分析した（図表 3-25）。なお新町川一帯のイベントとして「とくしまマルシェ」、「マチ★アソビ」、「Renta! 水都

図表 3-25　新町橋一帯および東新町商店街における平常時とイベント開催時の滞在人口（1 日平均）の比較

《条件》
集計方法：全人口推計値
データ期間：［平常時　平日］　2026 年 5 月 11 日（月）～ 15 日（金）
　　［平常時　休日］　2026 年 5 月 9 日（土）～ 10 日（日）
　　［マチ★アソビ］　2026 年 5 月 16 日（土）～ 17 日（日）
　　［とくしまマルシェ］2026 年 5 月 31 日（日）
　　［Renta ！水都祭］2026 年 7 月 17 日（金）～ 19 日（日）
　　［阿波おどり］　2026 年 8 月 12 日（水）～ 15 日（土）



データ提供：KDDI・技研商事インターナショナル「KDDI Location Analyzer」

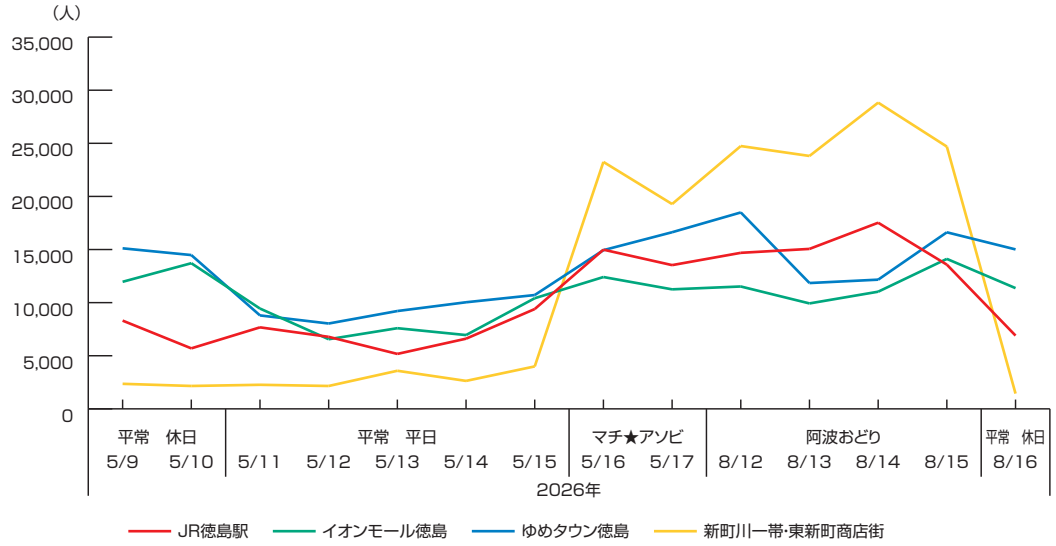
祭(以下、水都祭とする)」、「阿波おどり」を選定した。

分析の結果、とくしまマルシェ開催時は平常時の平日と同等の水準にとどまる一方、水都祭は約 13,000 人、マチ★アソビは約 28,000 人、阿波おどりは約 37,000 人にまで跳ね上がっており、イベントの集客規模に比例して平常時とのギャップが拡大することが明確に表れている。

さらに、郊外の主要商業施設(イオンモール徳島、ゆめタウン徳島)の来訪者数と比較した(図表 3-26)。

図表 3-26　新町橋一帯および東新町商店街と、JR 徳島駅、郊外の主要商業施設（イオンモール徳島、ゆめタウン徳島）との来訪者数比較

《条件》
集計方法：全人口推計値（月ユニーク）
データ期間：[平常時]　2026 年 5 月 9 日（土）～ 15 日（金）、8 月 16 日（日）
[マチ★アソビ]　2026 年 5 月 16 日（土）～ 17 日（日）
[阿波おどり]　2026 年 8 月 12 日（水）～ 15 日（土）
時間帯：6：00 ～ 24：00
来訪日数：1 日以上
滞在時間：15 分以上



データ提供：KDDI・技研商事インターナショナル「KDDI Location Analyzer」

その結果、新町川一帯および東新町商店街は、平常時は 2,000 人台、多くても 4,000 人弱で推移しているが、マチ★アソビ、阿波おどりといった大規模イベント開催時には 20,000 人を上回り、郊外商業施設をも上回る集客力を発揮している。

以上の結果は、当エリアの潜在的な集客力を示す一方で、こうしたポテンシャルが平常時の滞留へと波及・定着していないという課題を明示している。

(3)課題

○新町川沿いの公園の中心に位置する新町橋をみると、イベント開催時では多くの人が訪れる一方で非開催時での滞在人口が少なくギャップが大きい。また非開催時における滞在人口は、休日が平日を下回っている、さらには徳島駅前よりもかなり少なく、中心市街地活性化には程遠い現状。

○イベントの開催がこのゾーン、特に藍場浜公園に集中している現状。

○郊外大型ショッピングセンターがかつての商店街の役割を担っている現状、商店街が隆盛であったときと現在では取り巻く背景が大きく異なっていることから(「第 1 章　徳島市中心市街

地の変遷」参照)、復活には過去と同様の物販中心ではなく異なった方法が必要。



写真 3-16　東新町商店街　(当研究所撮影)



写真 3-17　西新町商店街跡に建設中の住宅商業施設
(当研究所撮影)

(4)今後の目指す姿

①「水辺×カルチャー・アクティブ×日常」が交差する「サードプレイス」

→単にイベント時だけに人が集まる場所から、日常的に市民や来訪者が「憩い」「滞留」できるアーバンスペースに再定義

→常設コンテンツを配置し、「何かをして過ごせる」空間の形成

②水上交通を軸とした「面」への回遊ネットワーク形成

→「川の駅」の拠点機能を強化し、シームレスに人を行き来させる「周遊のハブ」に

→観光客に加え、市民・県民の利用増加

→「四国のベネチア」と呼ばれるぐらいになれるよう、船がもっと行き交う川を目指す

③文化・音楽の発信拠点

→阿波おどりの拠点エリアとして、演舞や練習などをいつでも目にできるエリア

→新県立ホールを抱くエリアとして、音楽・文化に常に触れられる空間

④生まれ変わる商店街

→文化施設・飲食・サービスなどがふんだんに入居した新たな姿

→文化振興・コト消費の拠点

→近隣も含め居住機能の拡充

⑤防災・フェーズフリーとしても機能

→(公園を中心として)災害時におけるさまざまな拠点・ハブとして機能

※「1．徳島駅前ゾーン」の「防災・フェーズフリー」における内容と同様

(5)提案する施策

①水辺公園としてのプレイスメイキングと多世代の市民による日常利用の促進

○日常のアクティビティ空間としての整備。

→散歩・ランニング・犬の散歩(ドッグラン)など、市民の健康・憩いニーズへの対応。

→アーバンスポーツ(スケートボード、BMX、3x3バスケットボール、ダンスなど)の導入。

→芝生広場の設置と常設パークカフェ（オープンテラス)、キッチンカー出店による「芝生×飲

食」の滞留空間の配置。

→都市型アウトドア空間（ピクニックなど）の配置。

○全天候型対応の空間整備。

→悪天候時でも滞在、阿波おどりの演舞・練習ができるよう、藍場浜公園に屋根を設置。

○イベント空間としての機能維持・拡充。

→「阿波おどり演舞場」に加え、「とくしまマルシェ」「マチ★アソビ」「はな・はる・フェスタ」「阿波の狸まつり」など有名・大型イベントの継続・発展。

②新県立ホール（音楽・文化ホール）との相乗効果

○ホール屋外でも音楽・文化が楽しめる空間づくり。

→演奏、ミニライブ、パフォーマンスなどが気軽にできる公園の設備・構造の整備（ベンチ、段差、階段ほか）。

→阿波おどりとの共存・両立も目指す。

③東新町商店街の生まれ変わり

○文化とコト消費の発信拠点。

→ ufotable（ユーフォーテーブル）などを核としたアニメカルチャーのより全面的な押し出しと、阿波おどり会館との連携体験。

→美術館などの整備。また、図書館や博物館など文化の森も含め郊外にある公的文化施設のサテライト（付属）施設の設置や移転の検討。

→商店街の近隣含め、マンションや都市型住宅の誘致・リノベーションによる職住近接のまちなか居住人口増加の推進。

④河川交通の拠点としての機能強化

○「ひょうたん島クルーズ」のさらなる拡充。

→「徳島といえば『ひょうたん島』」というイメージアップ・ブランド化の推進。

○「川の駅」としての拠点機能向上。

→乗船場としてだけではなく、観光スポットとしてもさらに際立つ存在。

○広域水上アクセス（広域回遊）の拠点。

→新町川から「万代ふ頭」「末広（アリーナエリア）」などへ直接移動できる水上ルートのさらなる拡充（2026 年 7 月から「新町川クルーズ」が通年運航開始）。

→撫養航路（鳴門方面）などの拡充を通じ、県都以外との交流の拡大・促進。

→観光客だけではなく、市民・県民の足としての利用も促進。

⑤防災・フェーズフリー機能の配置

○公園を中心として、ハード・ソフト両面にわたり防災・フェーズフリー機能を備えた仕様を採用。

※「１．徳島駅前ゾーン」の「防災・フェーズフリー」における内容と同様。

（６）事例

①水辺のプレイスメイキング

○富山市富岩運河環水公園

富山市東岩瀬港と富山市街地の間に水運を開き臨海工業地帯を形成する目的で昭和初期に開削された「富岩運河」は、パナマ運河方式を採用した水位差を調節する堰（中島閘門（なかじまこう

もん)・国重要文化財)などを有するなど、地域経済を支える重要なインフラであった。水運の衰退により運河の埋め立て計画も持ち上がったほどであったが、「とやま都市 MIRAI 計画(1985 年度)」「とやま 21 世紀水公園神通川プラン(1984 年度)」のもと都市の貴重な水辺空間としての整備が始まり、1997 年には一部開園。2008 年には「スターバックスコーヒー富山環水公園店」がオープンし、同社内のデザインコンテストで最優秀賞を受賞し「世界一美しいスタバ」の一つとして有名になった。



写真 3-18　富岩運河環水公園
(富山県 WEB サイトから引用)

○水都大阪の再生

2001 年に国から「第 3 次都市再生プロジェクト」の指定を受け、2003 年に「水の都大阪再生構想」を公表し、以降水の都を取り戻すべく水辺の生活を活気あるにぎやかな場へと再生するためのさまざまな試みを展開。大阪府では、「大阪ふれあいの水辺」「八軒家浜(八軒家防災船着場・川の駅はちけんや)」「ほたるまち(福島港防災船着場)」「中之島バンクス」「西天満若松浜(ラブセントラル)」「北浜テラス」「木津川遊歩空間(トコトコダンダン)」など銘打った水辺空間のさまざまな整備を進めてきた。大阪市では、道頓堀川の水辺整備(遊歩道・水門の整備、湊町リバープレイスにあわせた整備)などを行ってきた。



写真 3-19　水都大阪コンソーシアム「水都の教科書」から引用

②公的文化施設の都心部への移転

○富山県美術館

1980 年竣工・1981 年開館の富山県立近代美術館は、老朽化、対防災性の脆弱さなどの課題や中心市街地から離れているといった市民からの不満を抱えていた。2013 年に新たな美術館建設の基本計画を策定し、2017 年に富岩運河環水公園地区にオープンさせた。



写真 3-20　富山県美術館
(富山県美術館 WEB サイトから引用)

③アーバンスポーツ施設の整備



写真 3-21　UZU PARK
（鳴門市公式観光サイトから引用）

○ボートレース鳴門(UZU PARK（ウズパーク))・ボートレース児島

ボートレース鳴門では、施設の全面リニューアルの一環として 2018 年にさまざまなアーバンスポーツを楽しむことができる「UZU PARK（ウズパーク)」を開設した。現在は、バスケットボール･3x3 バスケットボール･スケートボード･フットサルのコート、ボルダリング設備も有する多目的ホール「UZUHALL」、サイクルステーションが設置されている。また、自然災害など非常時と平時の両局面で活用できるフェーズフリーの認証を受けている。

ボートレース児島(岡山県倉敷市)でも、パークエリア事業としてアーバンスポーツ施設や芝生広場などの整備を進めており、2027 年の完成を目指している。

図表 3-27　アーバンスポーツ広場のイメージ



注：当研究所撮影写真を用いた上で、AI により作成。

４．城山～鷲の門 ゾーン

（１）本ゾーンの範囲

○徳島中央公園のうち城山を含め東側のエリア

→徳島中央公園のうち、下記「７．徳島駅北エリア」を除くエリア

（２）過去から現在に至るまで

○徳島城

1586 年：阿波藩祖・蜂須賀家政が徳島城を築城

1873 年：廃城令では存城処分（陸軍省所管の行政財産）

→旧御花畠には幕末期に練兵場が設置

1875 年：鷲の門を除く建築物はすべて撤去

→旧御花畠には 1889 年に徳島監獄署が設置

2006 年：日本 100 名城 ® に選定

徳島城址が国史跡に指定

○徳島中央公園

1906 年：日露戦争戦勝記念により徳島公園として開設

1941 年：表御殿庭園が国の名勝に指定

1945 年：空襲により城跡内のほとんどの建物と鷲の門焼失

1977 年：徳島中央公園に改称

1989 年：鷲の門再建（徳島市市制 100 周年を記念、篤志家による寄贈）

日本の都市公園 100 選選定

1990 年：同公園内の徳島県立図書館が徳島県文化の森総合公園に移転

1992 年：徳島市立徳島城博物館開館

2023 年：徳島城阿波おどりを初開催（以降、毎年 4 月下旬に開催）

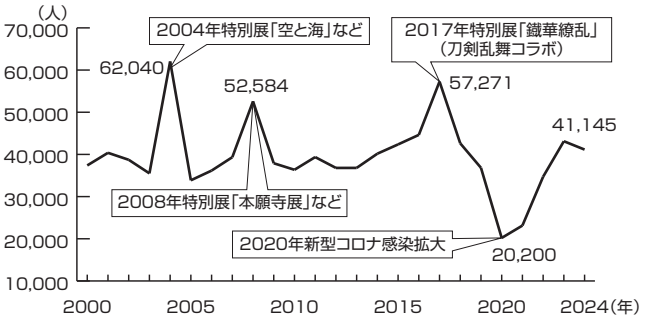
（３）現状

①統計

本ゾーンは、徳島城跡（城山）、鷲の門、徳島城博物館等が集積し、散策や歴史学習の場として利用されている。

核となる徳島城博物館の年間入館者数は、平常時は 3.5 万～ 4 万人前後で推移している（図表 3-28）。一方、特別展「空と海」が開催された 2004 年度には 6 万人を超え、特別展「本願寺展」が開催された 2008 年度には 5 万 2,584 人、特別展「鐵華繚乱」およびアニメ『刀剣乱舞』とのコラボレーション企画が実施された 2017 年度には 5 万 7,271 人を記録した。2020 年度は新型コロナウイルス感染症の影響による休館や各種イベントの中止が重なり、約 2 万人まで減少したが、近年は年間 4 万人

図表 3-28　徳島城博物館の年間延べ入館者数推移（人）



出所：徳島市統計年報、徳島市立徳島城博物館 WEB サイトより作成

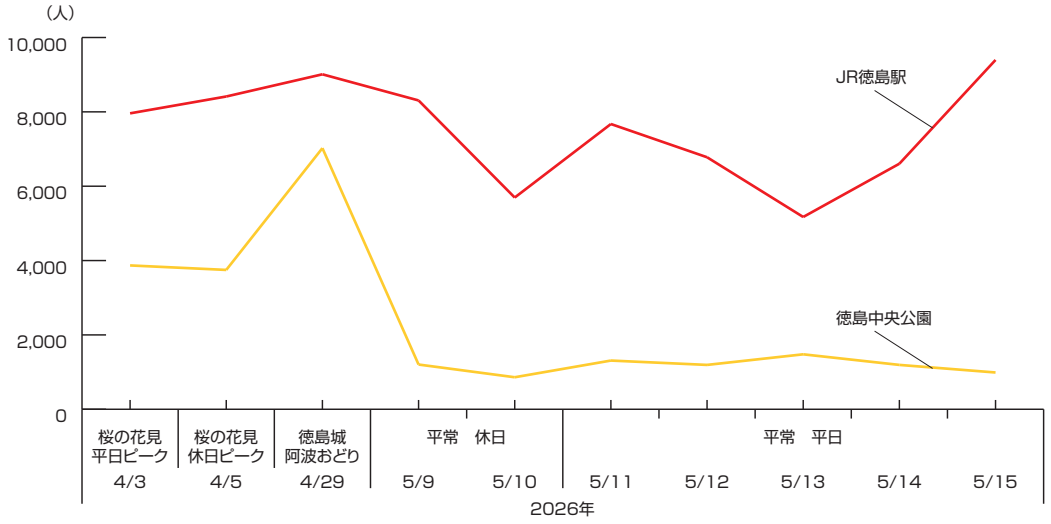
規模に回復している。このように、入館者数の大幅な増加には話題性の高い特別展などが寄与していることが確認できる。

②人流データ

徳島中央公園の人流動態について、まずは来訪者数を JR 徳島駅と比較するかたちで分析を行った（図表 3-29）。

図表 3-29　徳島中央公園と JR 徳島駅の来訪者数の比較

《条件》
集計方法：全人口推計値（月ユニーク）
データ期間：[平常時]　2026 年 5 月 9 日（土）～ 15 日（金）
[桜の花見シーズン　平日ピーク] 2026 年 4 月 3 日（金）
[桜の花見シーズン　休日ピーク] 2026 年 4 月 5 日（日）
[徳島城阿波おどり]　2026 年 4 月 29 日（水・祝）
時間帯：6：00 ～ 24：00
来訪日数：1 日以上
滞在時間：15 分以上

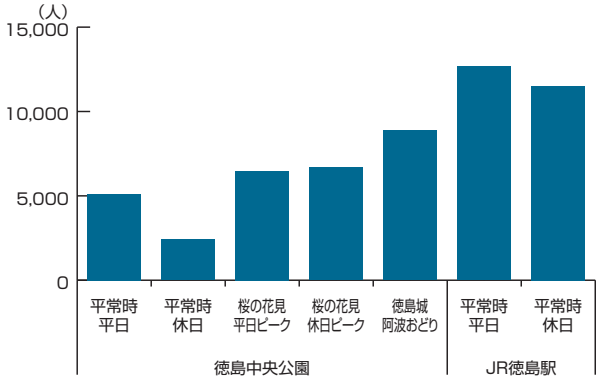


データ提供：KDDI・技研商事インターナショナル「KDDI Location Analyzer」
調査に用いたデータは au（KDDI）スマートフォンの位置情報ビッグデータ。（au スマートフォンユーザーからの同意に基づき取得し、個人が特定できない形式に加工した位置情報および属性（性別・年齢層）情報データ）
・データには 20 歳未満、およびインバウンド観光利用者のデータは含まれません。
・分析結果の数値は全人口推計値（サンプルを、国勢調査の市区町村別・性年代別人口に基づいて拡大した値）となります。
注：桜の花見シーズンの平日・休日のピークは、シーズン期間である 3 月下旬～ 4 月上旬の中で来訪者数が多い日を選定しました。

これをみると、平常時における JR 徳島駅の来訪者数が 7,000 人前後で推移しているのに対し、徳島中央公園の来訪者数は約 1,000 人～ 2,000 人にとどまっている。また、例年多くの人でにぎわう桜の花見シーズン（平日は 4 月 3 日、休日は 4 月 5 日をピークに設定）で約 4,000 人、今春に開催された「徳島城阿波おどり」においても約 7,000 人の来訪であった。同時期の JR 徳島駅の来訪者が 8,000 人～ 9,000 人規模で推移していることを踏まえると、県内有数の主

図表 3-30　徳島中央公園と JR 徳島駅の滞在人口（1 日平均）の比較

《条件》
集計方法：全人口推計値
データ期間：[平常時] 2026 年 5 月 9 日（土）～ 15 日（金）
[桜の花見シーズン　平日ピーク] 2026 年 4 月 3 日（金）
[桜の花見シーズン　休日ピーク] 2026 年 4 月 5 日（日）
[徳島城阿波おどり] 2026 年 4 月 29 日（水・祝）



データ提供：KDDI・技研商事インターナショナル「KDDI Location Analyzer」

要駅に隣接する立地環境にありながら、駅来訪者の人流が徳島中央公園に十分に波及していない現状がうかがえる。

続いて、同公園の滞在人口(1日平均)をJR徳島駅との比較分析を行った(図表3-30)。これをみると、徳島中央公園の平常時における滞在人口は、平日の約5,000人に対し、休日は約2,000人と半減している。また、イベント開催時(桜の花見シーズン、徳島城阿波おどり)の滞在人口は7,000人～9,000人規模まで増加するものの、いずれもJR徳島駅の平常時の滞在人口(11,000人～13,000人)を下回る水準にとどまっている。これらのデータは、隣接するJR徳島駅と徳島中央公園との間で、歩行者の相互回遊や滞留の連動性が十分に構築されていない現状を裏付けるものとなっている。

(4)課題

○国指定史跡に指定されているとはいえ、人を吸引するハード施設は徳島市立徳島城博物館しかない現状であり、阿波おどりや花見といったイベント時以外の平常日における来訪者・滞留者数は低迷。

○上記に加え、同公園が周辺を中心に徳島市内に所在する大学・高校に通学する学生・生徒の実質的な通学路にもなっているにもかかわらず滞在時間が短い現状もあわせると、サードプレイスとしての機能が決定的に不足していることが露呈。

○徳島駅前ゾーンとの物理的近接性にもかかわらず、アクセスルートが貧弱なために来訪され難い現状。

(5)今後の目指す姿

①「徳島城アセット」の復元・保全による県都のシンボリック・ランドマークの創出

→徳島城の再建などを進め、「城下町・徳島」を訴える象徴的景観を形成

→シビックプライドの醸成と観光のランドマーク化

②「歴史・伝統のアセット(静)」と「多世代アクティブ(動)」の融合

→再建される城や石垣・庭園、徳島の文化に直に触れられるといった「静」、若年層向けスペースやラン＆ウォーク(ウェルネス)、大型イベントの受け皿(アクティブ)といった「動」を融合させた公園

③「史跡活用型パークマネジメント」の導入

→上記①・②に向けた公的投資に関連して、Park-PFIなどを活用した民間収益施設を配置

→歴史保護とにぎわい創出が両立するパークマネジメント

④「徳島駅前ゾーン」と連動した「ウォーカブル＆ウェルネス軸」の形成

→現状は貧弱なアクセスルートの改善し、歩行者をスムーズに同公園に誘導

→観光客も市民・県民もウォーカブルもウェルネスも体験できる空間

⑤(上記①～④を通じて)徳島の顔「セントラルパーク」として有名スポットを目指す

→名実ともに「セントラルパーク」としてステータスを確立

(6)提案する施策

①「徳島城・月見櫓(つきみやぐら)」などの復元・保全と歴史ツーリズム

○月見櫓の復元(再建)による県都の新たなランドマークを創出。

→阿波青石の石垣群の保全と魅力化もあわせて推進。

→歴史散策ルートの再構築、ライトアップなどによる景観化。

○庭園や徳島城博物館との連携。

→史跡空間との一体的な歴史体験エリアとして再構築。



写真 3-22　明治初期の徳島城　（徳島県立文書館デジタルアーカイブから引用）

②「観光向け伝統文化」の消費拠点

○文化を体感できる（コト消費）施設の設置。

→阿波人形浄瑠璃・阿波おどりなどを鑑賞、藍染・陶芸・木工などを体験できる場所。

→徳島市立徳島城博物館の拡充。

→公的文化施設の同公園内への設置も検討。

○歴史空間にマッチする「伝統茶屋・カフェ」などの設置。

→徳島独自の飲食（和三盆、阿波ういろう、阿波晩茶ほか）を味わえるスペース。

○にぎわいの創出も両立させたパークマネジメント。

→ Park-PFI など民間も活用した取り組み。

※「埋蔵文化財包蔵地での建築」に当たっては、文化財保護法などによる規制・制限をクリアする必要。もっとも保護層（盛り土等）の確保、遺構に影響のない工法の採用、低層など軽量の建築といったことにより、こうしたエリアでの建築は認められる可能性は上昇。

③若年層＆ウェルネスに向いた日常利用の空間

○近隣大学生・高校生等向けの「スペース」の整備。

→徳島大学や徳島市内の多くの高校の通学圏である強みを生かし、これらの学生・生徒が日常的に集い、学習や交流ができるサードプレイスを創出。

○ウォーキング・ランニング・ペット散歩のための周遊ルートの最適化。

→城址東側の堀・助任川沿いや木々に囲まれた環境をさらに生かし、ウェルネススポットとして利用する市民・県民の増加を目指した整備。

④イベント機能のさらなる受け入れと「静と動のゾーニング」

○大型イベントのさらなる受け入れ。

→藍場浜公園などで開催されているイベントの一部を同公園内での実施にシフト。

→「徳島城阿波おどり」「花見」以外の名物イベントの誘致と定着。

○「静（歴史保全）」と「動（アクティビティ）」の調和。

→庭園などの歴史保全ゾーン(静)と若年層向けサードプレイス、各種ウェルネス、イベントなどのアクティブゾーン(動)を明確にゾーニング。

⑤徳島駅前ゾーンからのアクセスの改善

○シームレスにアクセスできるルートの設置。

→新陸橋の整備などによる第四のルートの新設。

※現在の徒歩ルートは以下の3つのルートのみであり、非常に脆弱(JR線路による分断)。

・ポッポ街→御花畠踏切→徳島市立体育館南

・寺島本町東1丁目陸橋(NHK徳島放送局近く)

・国道192号線立体交差点→鷲の門

→案内サインと地上動線の誘導により、迷わず同公園に立ち寄れる地上視認性の向上。

→「1．徳島駅前ゾーン」「2．元町～阿波おどり会館～眉山 ゾーン」などでのウォーカブルと連動。

(6)事例

①史跡・城郭公園における調査・復元・整備

○国宝松江城二の丸

2000年と2001年の2期に分けて、南櫓・中櫓・大綱櫓や土塀などを江戸時代の図面や発掘調査をもとに忠実に木造で復元。総事業費は、発掘調査なども含め約12.8億円。

現在、天守大規模改修(工期：2027年から2030年・総事業費約29億円)が計画されている。



写真3-23　松江城 遠景　(松江市WEBサイトから引用)

○岡崎城

愛知県岡崎市は、徳川家康公が生誕した岡崎城(1959年に天守閣などを復興)において「岡崎城跡整備基本計画(2016年度改訂版策定)」を進めてきた。この計画は、「史跡を未来へ確実に保存し、本質的価値を顕在化させる」「城下町である市街地へつなげ、流れ(ストーリー)のある総構えの整備・活用をする」を目的としており、「天守台石垣」「籠田総門」「坂谷曲輪」などの発掘調査を次々と進めてきた。「菅生曲輪枡形」では、この特徴である枡形の顕在化や見学用の園路整備も実施した(2021年度完了)。またこの城址も含む「乙川リバーフロント地区」の整備・振興にも、上記の整備が続けられている歴史遺産が大きな柱の一つとなっている。



写真3-24　岡崎城・2023年度坂谷曲輪発掘調査
(岡崎市WEBサイトから引用)

② Park-PFI の導入

○広島城三の丸



写真 3-25　広島城三の丸 Park-PFI を活用したにぎわい施設の整備（広島市 WEB サイトから引用）

2020 年策定の「広島城基本構想」では、歴史・文化の発信拠点、観光拠点としての魅力向上が打ち出された。これを受けて 2021 年に策定された「広島城三の丸基本計画」では、同三の丸において、歴史・文化の発信の中心的な役割を担う展示収蔵施設と飲食・物販施設など観光客・市民からニーズの高い便益施設の導入を図ることが盛り込まれた。また後者の飲食・物販施設については、Park-PFI による整備を図ることとされた。第 1 期は 2025 年 3 月に開業し、飲食、物販、アミューズメント（ミニ弓道場）の 5 店舗が出店している。なお、第 2 期分は 2027 年の開業を目指している。

図表 3-31　徳島城・月見櫓の復元イメージ



注：徳島県立文書館デジタルアーカイブ収蔵写真および
当研究所撮影写真を用いた上で、AI により作成。